

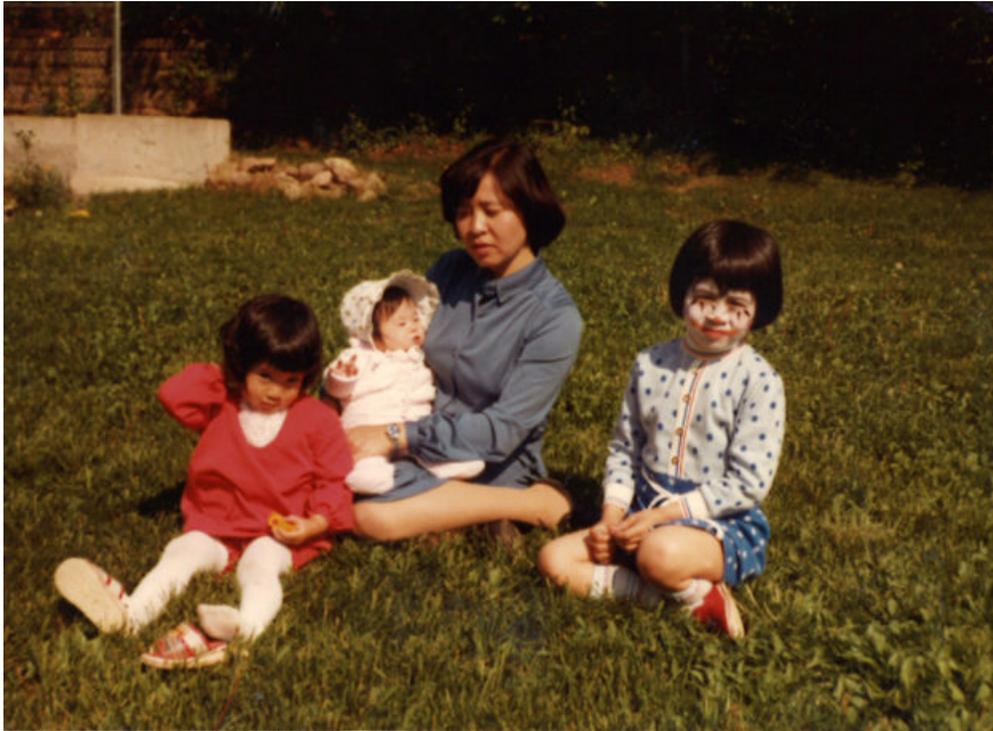
社会

vol.03 私たちは日本人か、それとも米国人なのか トランプ政権下のアイデンティティ | ケイン岩谷ゆかり

Text by Yukari Iwatani Kane

ケイン岩谷ゆかり 1974年、東京生まれ。米ジョージタウン大学外交学部卒業。1996年にロイターに入り、2006年～11年、ウォールストリート・ジャーナル記者。15年からカリフォルニア大学バークリー校ジャーナリズム大学院講師。著書『沈みゆく帝国 スティーブ・ジョブズ亡きあと、アップルは偉大な企業でいられるのか』（日経BP社）ほか

Translated by Courier Japon



子供時代の著者、2人の妹と母

ウォール・ストリート・ジャーナル記者として、アップル社をはじめとしたテック記事で数々のスクープを出してきたジャーナリスト、ケイン岩谷ゆかりが、トランプ政権下の米国のリアルな日常を描き出すレポート。日本と米国の両方に根を持ち、2つの国に属してきた著者にとっての「米国」とはなにか？ 同じように米国で生活をする妹との対話を通じて、「トランプ」と「ナショナリズム」を明晰に浮かび上がらせる。

アイデンティティ・クライシス

最近、私はこれまでになく「人種」や「米国人であることの意味」について考えている。

子供のころ、私と妹2人は典型的な帰国子女だった。私たちは父が米国に転勤することになったため渡米した。私は幼稚園から小学4年生まで米国の学校に通ったが、その間も私たちは常に片足を日本に置いていた。というのも、いつ日本に帰国することになるかわからなかったからだ。海外勤務の期間はたいてい2年から3年だ。だが私たちの滞在期間は7年に及んだ。



子供時代の私と妹2人

父が東京に戻されると、私たちはもう日本を離れることはないものと考えた。それが普通だったからだ。ところが5年後、父は再び米国に転勤を命じられる。今度の赴任先はメリーランド州だった。妹と私は米国で高校と大学に通い、就職し、そして、そのまま米国に残った。

私たちが日本に一時帰国すると、友人や親戚の多くは、私たちのことを米国人とみなした。だが私自身は、本当にそうなのか確信が持てずにいた。成長の過程で私は、複数の文化をまたぐ者が決まって経験する「アイデンティティ・クライシス」に陥る。米国では自分は日本人だと感じ、日本では自分は米国人だと感じる。そんな私にとっては、どちらか一方をとるより、自分は2つの文化と国に属するのだと考えるほうがしっくりいった。

トランプ政権下の「マイノリティ」

だが年を重ねるなかで、いつか選択を迫られるときが来る。人はどこかに根を下ろさなくてはならない。自分の将来に責任を持ち、人生の見通しを立てなくてはならない。

そして数年前、私は気づいた——自分にとっての「故郷」は、米国なのだと。

大切な人の大半は米国にいる。夫も、家族の大半も、執筆業に携わる仲間も、友人も。またその頃には、自分はもう日本人より米国人に近いであろうことも認めるようになっていた。そしてこの事実、トランプ政権下で多くの不安と向き合ううえで、すべてを変えた。

「海外子女」であるというのは奇妙なものだ。米国に暮らしているあいだ、自分は常に「ゲスト」であるかのような感覚を抱いていたからだ。

私は小学生のときから中高、そして大学生に至るまでずっと、政治は遠いもののように感じていた。原因の

ひとつは、自分に投票権がなかったからだ。だがいまは、米国の将来に個人的な利害を感じている。そして大統領選後、社会に蔓延した敵意や差別意識にとりわけ懸念を覚えている。日本人は、イスラム教徒やヒスパニックのように標的になることはないが、きっかけさえあれば、簡単に矛先を向けられる対象になり得ることを私は微塵も疑っていない。不寛容な国というのは、他のマイノリティ同様、私たちにとっても良からぬものなのだ。

私がいま味わっている落胆と恐れは、忌まわしいものであると同時に、馴染みのない、新しいものである。それはまた、多くの問いを投げかける。私のことを決して米国人とは認めない人がこんなにも大勢いるこの国で、米国人であるというのはどういうことなのか。

それは私の米国人としての自覚のあり方を変えるのか。私は日本へ帰りたいのか。私はいまも米国に属する人間なのか――。

自分の人種との葛藤

こうしたことについて話し合うため、私は妹のまゆに電話した。まゆは、シカゴで生まれた。東京に帰ったときは小学1年生で、メリーランド州に引っ越したときは6年生、父が南カリフォルニアに転勤になったときは10年生だった。

以来、彼女は南カリフォルニアに暮らす。ロサンゼルスに大学に進学し、社会福祉学で修士号を取得。現在は公立校の運営管理者として、子供の福祉、出欠席、カウンセリングにかかわる業務に携わっている。

以下が私たちの交わした会話の抜粋である。

私：ハイ、まゆ！ あなたと話したかったの。というのも最近、自分のアイデンティティについてよく考えるの。自分は日本人なのか、それとも米国人なのか。成長するなかで、このことについては、ずいぶん悩まされたわ。だって日本にいるときは、自分は米国人であるように感じて、米国にいるときは、日本人であるように感じていたから。

でも外国特派員として日本に派遣されたとき、気づいたの。自分には米国と米国文化のほうが合っているんだって。ところがいま、トランプが大統領に選出されてからの数ヶ月間、改めて葛藤を感じているの。自分の人種をかつてなく意識するようになってる。あなたも同じようなことを感じていたりする？

まゆ：もちろん、感じているわ。でも私の場合、そんなに新しいことではないわ。だって私はこれまでずっと葛藤してきたから。

私：え、本当に？ 私から見れば、あなたはすごく米国人っぽいのに。

まゆ：でも私たち、移民ではないでしょう。

私：そうね。祖国を後にしたわけではないからね。米国にいるのは、父親が米国に転勤になったからにすぎない。

まゆ：そうそう。べつに、ずっと米国に居続けるつもりはなかった。メリーランド州に引っ越したときは、住民はとにかく白人か黒人のどっちかで、その他の人種はまばらにしかいなかった。だから私は白人になりきろうとした。それ以外に自分がフィットできる場所はないように思えたから。米国の北部と南部を分ける

境界州にいることのプレッシャーをあなたが感じたかどうかは知らないけど。

私：たぶん感じていなかったと思う。私の友達是人種的にけっこう多様だったから。エリカは黒人で、ステイシーと私はアジア系、キャロラインは白人だった。でも確かにあなたは人気のある子たちと一緒にいたがったわよね。私はそうじゃなかった。

まゆ：私は箸の使い方も知らなければ、寿司も食べないフリをしていたのを覚えている？ 自分には居場所がなかったから、なんとかして居場所を作ろうとしたの。私たち、米国にいる日本人の間でも浮いていたでしょ。日本で生まれ育ってないから。

その後、カリフォルニアに引っ越したときは、ここなら居場所が見つかるはずだと思った。アジア系が多いからね。でも、そうじゃなかった。私は自分のことを日系米国人だと思っていた。ところが、いわゆる日系米国人は、私たちとはぜんぜん違う経験をしている人たちだった。



妹・まゆのキンダーでのクラス写真

私：親戚や親が第2次大戦中に強制収容所に入れられたりね。

まゆ：そう。というわけで私はこれまでずっと、自分はどのグループにも属さないことを意識してきたの。（カリフォルニア州）アーバインである年、7月4日（独立記念日）の祝賀イベントに参加したときのことを覚えているわ。友達とスタジアムで花火が打ち上げられるのを見ていたの。でも私は歌ってもいなかったし、歓声をあげてもいなかった。

すると隣にいた男が私に向かってこう言ったの。「この国を愛していないなら、故郷（くに）に帰れよ」て

ね。自分は米国に属さないことを、と同時に、たとえ望んだとしても、「帰る場所」があるようには思えないことを改めて思い知らされた。

以来しばらくの間、7月4日が嫌いだった。

私：……（絶句）。

まゆ：あの男のような人たちが、いまの政治状況下では、より大きな声を持つようになっている。

私：つまり、憎しみをあらわにした言葉をあなたは面と向かって言われたことがあるってこと？

まゆ：その通りよ。つい最近も、旅行するときはカナダのピンを胸につけるって冗談を言ったら、ある男にこう批判されたわ。「米国人であることに誇りを感じないのか」とね。さまざまな経験や背景を持つ人たちのことをまったく考慮していない無神経な発言だと思った。私たちのように2つの異なる文化をまたいで生きる者は、自分のなかにある異なる文化のいろんな面に誇りを感じるのと同時に、それぞれの弱点も認識している。私たちは盲目的に何かを愛することはないのよ。

米国民でなくても「忠誠の誓い」

私：それは確かね。学校で「プレッジ・オブ・アレジアンズ（忠誠の誓い）」を唱えたのを覚えているわ。米国民でもないのに、胸に手を当て忠誠を誓った。「私はアメリカ合衆国の国旗と、それが象徴する共和国、神のもと不可分一体で、すべての人に自由と正義が約束されたこの国に忠誠を誓う」とね。

愛国歌もたくさん歌えた。「アメリカ・ザ・ビューティフル」も「ゴッド・ブレス・アメリカ」も「マイ・カントリー・ティズ・オブ・ジー」も。「君が代」の歌詞は知らなくても「星条旗」は歌えた。考えてみれば、おかしいわよね。

幼いころ、私は自分が周囲と違うと感じたことはなかったように思う。自分は皆と同じだと思っていた。中国人と日本人をネタにした歌も歌っていたくらいよ。覚えている？ こんな感じだったと思うの。

「お父さんは中国人で、お母さんは日本人。そうしたら私はこんなふうになっちゃった」

歌いながら「中国人」と言ったときには両手で目をつり上げて、「日本人」と言ったときには垂れ目にして、最後は片目をつり目、もう一方は垂れ目にするの。

自分の無頓着さが信じられないわ。

「自分は日系米国人」

まゆ：私は常に自分はどこにも馴染まないと感じてきた。日本に帰国したときですらね。本当に辛かったな。皆とは違う、「アメリカ人すぎる」という理由でいじめられた。



日本の七五三で

先週末、「マイクロ・アグレッション（自覚のない差別的言動）」や「インプリシット・バイアス（隠れた偏見）」に関するカンファレンスに出席したの。特定の相手に無意識のうちに偏見や差別感情を抱く人たちに関する研究発表を聞いたわ。

いま起きていることは何かというね、人々が抱いている隠れた偏見が、表面化して、増幅しているのよ。そういう見解を後押しする大統領がいるせいだね。

私：で、あなたは自分を日本人だと思うの？ それとも米国人だと思うの？

まゆ：私は周囲に自分は日系米国人だと言っているわ。

私：私は自分が何者なのかわからない。日本に帰るときは「帰国する」と言って、米国に帰るときも「帰国する」と言っている。

まゆ：私は自分に「帰る国」があるとは感じていない。私にとって帰る場所とは、基本的に自分が生活している場所のことよ。

私：私にとって帰る場所は、いまはどちらかという米米だと思うの。私にとって大切な人たちがいる場所だから。ここには（人種間の）憎しみや、私たちのことを決して受け入れない人々がいるのはわかっている。でも私の周囲の人たちは、私を受け入れてくれている。重要なのは、それじゃない？



妹・まゆの高校の卒業式で

「子供をべつの学区に通わせたい」

まゆ：確かにそうだと思う。私にとっても、帰る場所とは、自分の親族・仲間がいる場所のこと。でも私は「歴史は繰り返さない」という考えは信じない。だっていま、こんなにも憎しみが……職場で生徒の親が毎日のように私のところにやってきて、子供をべつの学区に通わせたいと訴えるんだけど、その理由が人種にかかわる場合が多いの。

こんなふうにするのよ。

「娘は白人でキリスト教徒だから、この学校は娘にはふさわしくない」

つまり、ここにはラティーノが多くて、彼らの間で自分の子供は安全ではないってことを暗に言おうとしているの。あるいは、こんなふうと言われることもあるわ。

「私たちはインド人です。私たちにとって教育は重要なのです」

まるで他の人たちにとって教育は重要でないかのようにね。こうした発言は、文化的環境に刺激されて出てくるもので、こうした声は大きくなっているわ。彼らは、こうしたことを声を大にして言う権限を与えられたように感じているのよ。

私：これは新しい現象なの？

まゆ：いいえ。でも以前は、少なくとも、こうしたことを言うのは良いことではないという認識があった。でもいま、親たちは、言っているように感じている。彼らはこう考えるの。

「大統領が言っているんだから、私たちだって言っているんじゃない？」ってね。

私：そんなとき、あなたはどうか対応するの？

まゆ：転校希望の理由を「うちの子は白人だから」と言う親には、こう聞くの。「それはつまり、どういうことですか？ もう少し詳しく聞かせてください」って。彼らに、思っていることをはっきり言わせることで、自分たちがどんなに人種差別的に聞こえるかってことに気付いてくれるのを期待するの。

興味深いのは、白人だけが他の人種に敵意を抱いているわけではないことよ。黒人の一家に、子供がいま通っている学校は白人多いから、子供を転校させたいと言われたこともあるわ。まるで米国がちっとも前進していないかのように思えて、がっかりよ。

日本と米国、どちらを選ぶ？

私：ちなみにあなたはヒラリーに投票したの？ ずっと民主党を支持してきた？

まゆ：ずっと民主党を支持してきたと言えると思う。でも保守的な民主党支持者だったこともある。社会福祉事業の必要性は当然、信じている。でも既存の制度を信用しているわけでは必ずしもない。私は、共依存の文化を培うより、各世帯の自立を支援する制度のほうがいいと思うの。心が揺れたこともあるわ。福祉事業の一部を共和党が支持しない理由が理解できたからよ。

私：もし日本か米国か、どちらかを選ばなくてはならないとすれば、どちらをとる？

まゆ：日本は諦めなくてはならないわ。仕事や人生のすべてがここにあるから。でも日本に帰ると、そこが故郷だって感じるのも確かよ。自分のルーツは日本にあるという感覚はある。おもしろいのは、自分が誇りに思うものを数えあげると、日本のもののほうが多くなってよ。

私：そうね。私にとって大切な人の大半は米国にいるからいまは米国が自分の居場所だと感じている。でもトランプに、あんなふうに敵意に満ちた発言をされるとわからなくなる。この先、私たちはどうなるのかしらね。

まゆ：結局のところ私は、米国人としても、日本人としても、完全に認められることはないと感じている。ただどちらかといえば、自分は日本人だと感じる。でもそれは、そう思っているだけのこともかもしれない。実際に日本に暮らしたとすれば、違ったふうに感じるかもしれない。

とは言え米国でも心から安心できるわけではない。「私は完全に米国人です」というセリフが私の口をついて出てくることはないと思う。私は有権者の大半がトランプに投票した地域で生活しているけれども、そのことが私にも「隠れた偏見」を抱かせていると思う。年配の白人を見ると、トランプ支持者に見えて、私に偏見を持っているように思えてしまう。

私：その気持ちよくわかる。今年の夏、ミシガン州に行ったとき、パトリック（夫）のお母さんと、私のお気に入りの精肉店に行こうとしたの。でもその店のオーナーが共和党支持者なのを知っていたから一瞬、店に入るのが心配になった。見ると店のなかには白人の男性が大勢いて、退役軍人の会合か何かを開催しようとしているようだった。「米国を再び偉大に」というトランプのスローガンが書かれた帽子はないかと思渡すと、まさに店内の片隅に飾ってあったのよ。でもね、店のオーナーは、今までと同じようにこの上なく感

じいいの。不思議じゃない？

ただ、このとき思ったの。「この人は、自分たちとは違う」と常に思われるようなところで私は暮らしたくないと。そういう意味でサンフランシスコは大好き。他の国からきている人たちも多く、雰囲気も国際的な町だし、誰も相手に対して「こうあるべきだ」という先入観がないからね。

まゆ：今回の大統領選がもたらした最悪の結果は、国民がお互いを信じられなくしたことだと思う。多くの人は隣人や同僚ですら相手を疑うようになった。

私：じゃあ、世間はどうやって前に進んでいくべきなんだろう？

まゆ：選挙後に蔓延したお互いへの不信感を考えると、それを乗り越えるには、私たちはこれまで以上に団結しなくてはならないのだと思う。国民を引き裂くのが彼らの手なら、それに対抗するには、私たちはお互いの共通点を見出し、共に手をたずさえなくてはならない。

彼らは、私たちが敵対することを望んでいる。だからこそ私たちは、お互いに歩み寄らなければならないのよ。

ケイン岩谷ゆかり [連載バックナンバーはこちら](#)

COURRIER